

令和3年度（第70回）「神奈川文化賞」及び 「神奈川文化賞未来賞」の受賞者プロフィール

神奈川文化賞

あんの ひであき
庵野 秀明 (61歳)

●芸術●

映像作品による特撮・アニメ文化の振興及び県内観光産業への貢献



映像作家として、多年にわたり数多くの作品を発表。

代表作のひとつ「新世紀エヴァンゲリオン」は、テレビシリーズ、劇場版ともに高く評価され、日本 SF 大賞など数々の賞を受賞している。また、箱根町が、物語の舞台となる要塞都市「第3新東京市」のモデルとなっており、エヴァンゲリオンのゆかりの地として親しまれている。作中では、箱根湯本駅や箱根登山電車、大涌谷や芦ノ湖など、見覚えのある箱根の風景も登場しており、国内に留まらず、海外からの旅行者など多くのファンが訪れている。箱根町とも「エヴァンゲリオン初号機」がデザインされたナンバープレートの作成など、たびたびコラボレーション企画を実施している。2021年に、シリーズ最新作「シン・エヴァンゲリオン劇場版」が公開され、興行収入が100億円を突破したことも話題となった。

総監督及び脚本を務めた「シン・ゴジラ」では、川崎市がロケ地のひとつとなり、市内の盛り上がりに一役買った。

2008年、2010年、2013年 日本アカデミー賞優秀アニメーション作品賞を受賞。

2017年 第67回芸術選奨映画部門文部科学大臣賞を受賞。

[東京都]

神奈川県文化賞

くま けんご

隈 研吾 (67歳)

●芸術●

建築家として文化の振興に貢献



(C) J. C. Carbonne

横浜市生まれ、横浜市育ち。東京大学大学院建築学専攻修了。1990年隈研吾建築都市設計事務所設立。東京大学教授を経て、現在、東京大学特別教授・名誉教授。

1964年東京オリンピック時に見た丹下健三の代々木の国立屋内総合競技場に衝撃を受け、幼少期より建築家を目指す。大学では、原広司、内田祥哉に師事し、大学院時代に、アフリカのサハラ砂漠を横断し、集落の調査を行い、集落の美と力にめざめる。コロンビア大学客員研究員を経て、1990年、隈研吾建築都市設計事務所を設立。これまで30か国を超す国々で建築を設計し、国内外で様々な賞を受けている（日本建築学会賞、フィンランドより国際木の建築賞、イタリアより国際石の建築賞、他）。その土地の環境、文化に溶け込む建築を目指し、ヒューマンスケールのやさしく、やわらかなデザインを提案している。コンクリートや鉄に代わる新しい素材の探求を通じて、工業化社会の後の建築のあり方を追求している。

2016年 「持続可能な建築」世界賞 2016を受賞。

2018年 日本建築学会 教育賞を受賞。

2019年 紫綬褒章を受章。

[東京都]

神奈川文化賞

やまね さだお
山根 貞男 (82 歳)

●文化活動●

映画評論家として、映画文化の普及に貢献



映画評論家として長年にわたり活躍。雑誌や新聞に映画評を書くとともに、映画書籍の編著を多数手がけ、国内外の映画祭では加藤泰、鈴木清順、成瀬巳喜男といった日本を代表する監督らの特集企画を立案し、コーディネーターとして参加。失われた日本映画のフィルムの発掘にも携わった。

1969年から1971年に、映画批評誌「シネマ」の編集・発行に参加。1986年より雑誌「キネマ旬報」に日本映画時評を書き続け、2010年までの連載が「日本映画時評集成」（国書刊行会）にまとめられた。

また、2021年6月に刊行された「日本映画作品大事典」（三省堂）に、編者として制作に当たった。1999年から22年をかけて完成した大著で、100年を超える日本映画の歴史を一冊にまとめ、約1万9,500本の作品、約1,300人の監督が掲載されている。あらすじをつけることで内容が分かるように工夫されており、研究者だけでなく、映画を愛する一般の人々に広く手に取ってほしいという氏の編集方針と抱負が活かされた。

他の主な著書に「映画狩り」、「映画の貌」、「マキノ雅弘—映画という祭り—」など多数。

2001年から2008年まで東海大学文学部文芸創作科教授として映画史・映画論を担当し、映画製作を目指す多くの若者たちの育成に努めた。

[横浜市]

神奈川県文化賞

いけもり けんじ

池森 賢二 (84歳)

●産業●

化粧品・サプリメント業界への
貢献及び環境活動や障がい者
雇用に尽力



1980年に無添加化粧品事業を個人創業し、翌年に株式会社ファンケルを設立。消費者の「不安」や「不満」に着目した商品は、これまでの化粧品業界にはない発想から作られ、急成長を遂げた。通信販売で商品を販売する「ダイレクト販売」の先駆けとしても注目され、アジアを中心に海外へも展開。2019年度の売上高1,268億円の企業に育て上げた。(代表取締役会長を退いた年度の売上高)

同社は、「世の中の『不』の解消を目指す」という経営理念から、環境にやさしい取組や障がい者雇用などに長年にわたり、取り組んでいる。その功績で、2011年度「かながわ地球環境賞」を始め、2017年に「横浜市食の3Rきら星活動賞」など、数々の賞を受賞した。

障がい者雇用については、1999年に特例子会社の株式会社ファンケルスマイルを設立。障がい者を社会的弱者として守るのではなく、一人の社会人として「自立」できるように支援することを念頭に置いた障がい者雇用を推進。

また、2016年に公益財団法人池森奨学財団を設立。ひとり親家庭等で経済的理由によって修学が困難な者に対し支援を行っている。2018年には池森ベンチャーサポート合同会社を設立し、起業家を支援している。

[東京都]

神奈川文化賞未来賞

う さ み

宇佐見 りん (22歳)

●文学●

作家として活躍



写真：宇壽山貴久子

静岡県生まれ、神奈川県育ち。現在は国文学を専攻する大学生。

小学生の頃から小説を書き始め、高校時代から文学賞への応募を始める。デビュー作「かか」（河出書房新社）で、2019年に第56回文藝賞を受賞。2020年に、同作品で第33回三島由紀夫賞を史上最年少で受賞。

20歳のときに手掛けた2作目の「推し、燃ゆ」（同社）で、2021年に第164回芥川龍之介賞を受賞。21歳での芥川賞は、綿矢りさ氏、金原ひとみ氏に続く史上3番目の若さでの受賞となった。

本作は、アイドルユニットのメンバーを「推す（応援する）」ことが生活の全てともいえる女子高生の物語。「自分の中の理想とどうにもならない現実とのギャップが小説を書く原動力になっている」と話す。

現在、3作品目を執筆中。

[非公表]

神奈川文化賞未来賞

たにほ れいな
谷保 玲奈 (35歳)

●芸術●

日本画家として活躍



身近な存在である海や山の動植物をモチーフに、生命の根源的な美しさと生々しさを日本画で表現している。大画面を彩る鮮やかな色彩が特徴的で、幼い頃、ドミニカ共和国やボリビアで過ごした経験が、多彩な色使いに影響を与えたという。

2018年には、注目の若手アーティストを紹介する横浜美術館のNew Artist Picksに取り上げられ、同館で個展「谷保玲奈展 共鳴」を行うなど、数多くの個展、グループ展に参加。

2020年に三溪園の旧燈明寺本堂で行った個展では、巨大な作品を、夜明けを迎える横須賀の海辺に置いて撮影した映像も上映。作品と日常、自然が一体となって存在しようとする強烈なメッセージを発信するなど、コロナ禍でも精力的に活動している。

大原美術館、神奈川県立近代美術館、佐久市立近代美術館、石正美術館、CCA Andratx、高橋コレクションに作品が収蔵されている。

2014年 第25回五島記念文化賞 美術新人賞を受賞。

2015年 第6回東山魁夷記念 日経日本画大賞 選考員特別賞を受賞。

2016年 第52回神奈川県美術展 神奈川県立近代美術館賞を受賞。

2021年 第8回東山魁夷記念 日経日本画大賞 大賞を受賞。

[葉山町]